

# 野の花の都市部での利用や 新たな実践について

## はじめに

これまでに、弊社は自然環境への配慮が必要とされる自然公園内や貴重な動植物の保全・復元を図るような場面において、自生地調査・採種計画、そして実践に向けての種子採取・種子精選、播種・育苗といった作業を複数年掛けて行なってきました。また、地域に残る貴重な自然環境の保全活動を通じて、そこにいる生き物やその生育環境を見て感じられるような環境学習などを自然再生事業の中で実践してきました。そこで得られた技術や知識を更に身近な場面で活かしていくために、近年取り組みはじめている都市公園内などにおいて、草刈り等管理費用の削減を目指した野の花による修景植栽や野草花壇の整備、そしてそれらを地域の方々と協働しながら行ない進めている取り組みについて紹介していきます。

## 1. 野の花による修景植栽について

ここでは、数十年前に芝草等で整備された公園内の一部分に草刈り等の維持管理費用削減と修景を目的として、そこに生えている芝草類と共存し、より高茎になるもの、或いは群落をつくるような特徴をもつ野の花（エゾクガイソウ、センダイハギ、オカ



写真2 7月 エゾクガイソウの咲く様子

トラノオなど)の苗を植え込んでおります(写真1)。実施より9年ほど経過した現在では、一部生育の悪かった草種はあったものの、ほとんどは定着し5月末ころよりセンダイハギが咲き始め、夏の終わりころまで花が楽しめ、園内の修景にひと役担う存在となりつつあります(写真2)。また、植栽後は有志によるボランティア活動により、観察用の園路の整備や開花時期に合わせて看板を設置したり、外来草本(主にオオアワダチソウ)の刈り取りなど、現在でも定期的にも実施されています(写真3)。

またこのほかにも、札幌市内において、建物周囲の修景に野の花を主とした花壇づくり(写真4)や公



写真1 植栽から1年後の様子



写真3 観察用に整備された園路



写真4 建物周辺に造られた野草の花壇



写真5 雨水浸透柵型花壇の造成1年後

園の駐車場で雨水排水設備の拡充と修景を目的とした雨水浸透柵型花壇の造成（主にノハナショウブなどの湿生植物）などを行なっています（写真5）。

## 2. 地域との協働による野の花植えの活動

もともと地域に生息していた野草は、開発等による環境の改変により、その生息環境が消失したことによって激減し、空き地の殆どは帰化植物によって覆われているのが現状です。これらの場所は帰化植物の好適環境となってしまうため、もともとの野草が生息することが困難な環境になっていると思います。そのため人為的に、野草を殖やして植えていくことで、そこを拠点が増えていき、ともに暮らす生物も増え、生物多様性が増していくことに繋がるものと考えられます。従来行なわれている公園緑地の維持管理やまちづくり活動の中で、花を植える活動はポピュラーになっていますが、殆どは通年咲き続ける1年草の園芸植物で、毎年沿道などを飾っています。市内の再整備された公園の一部分を活用し、これらの花植え活動の一部に「もともと地



写真6 1年目の植栽箇所



写真7 観察会の様子

域にあった野の花で生物多様性を増やしていこう」と考える機会を設けることによって、最初は弊社が提供した野の花苗を植栽する活動だけでしたが、植栽並びに周辺に残る自然林などの観察も行ないながら進めていこうと考え取り組み始めています。草種の選定に際しては、これまでの植生状況などの確認が重要ですので、その部分は慎重に進めなくてはなりません。そこで、まず過去の記録に残っているものから草種を選定し植栽と周辺に残る林の観察を実施しました（写真6、7）。1年目はそこで植えた植物がどういった生育をするのか手探りであったため植栽と観察会だけで済ませていたものの、3年目はそこでしっかりと育った野の花から種子も採種できるようになってきたため、植えた作業のあとにタネの観察・採種・種まきもその活動の中で実施し、翌年の夏には苗づくりを行ない（播種後からの育苗は設備の整った圃場で実施しサポート）、活動時にそこで育った苗の植栽も実施しているところです（写真8、9、10）。

このように植栽や野草の観察のみならず、種子採種から苗づくりへと活動を発展させ、さらに循環させる仕組みを作ることで息の長い活動とすることも可能になります。将来的には園内などに残る野草種



写真8 植栽活動の様子



写真10 苗づくりの様子



写真9 種まきの様子

でも同様な活動ができるようになることを目指し、継続していこうと考えています。

## おわりに

ここに紹介させていただいた取り組みは一部分のものですが、より身近な生活環境の場面や、より多くの人たちに知ってもらいたい技術、そしてここまで蓄積されてきた技術や情報（つながり）には多くの可能性が秘められているように感じています。自然復元関連の事業のみならず様々な場面において、多種多様な自然を手本に、その場面にあった目標を定め、じっくりと長期にわたり、知恵を結集しながら、順応的な管理を行うことが大切と感じています。

